

今日の9節から11節は主イエス・キリストの昇天を伝えている。

福音書の中では、ルカによる福音書だけが最後に、主イエスの昇天という出来事を描いているが、そのルカはこの使徒言行録1章9節から11節においても一度記録している。

9節「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」

昇天という出来事についてルカが強調して伝えることは、この出来事が、弟子たちが「見た」出来事である、確かに「彼らの目」で見た体験であるということ。ルカは非常に丁寧に「彼らが見ているうちに天に上げられた」という。それから11節の天使の言葉の中にも「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と繰り返して、天に行かれるところを確かに「あなたがたが見た」ことを強調している。

ここでの「雲」(νεφέλη、ネペレー)は、大空のただの雲というよりも、二つの意味で言われていると思われる。

一つは、旧約聖書の時代以来、モーセの臨在の幕屋が建つと神の栄光の雲が幕屋に満ちた、あるいはソロモン神殿が献堂されると神の栄光が神殿に満ちて雲が満ちた、と言われるように(出40:34、王上8:10-11)、神殿のご臨在と神様のご栄光のしるしという意味。

恐らく、ルカによる福音書の9章34、35節で、有名な変貌の山の出来事に出てくるものと同じであろう。「ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。すると、『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた」。

もう一つの意味は、昇天していく車としての雲と言う意味があると思われる。詩編104編3節でヤハウエを描く時に「雲をご自分のための車とし、風の翼に乗って行き巡る神、と言われている(詩編18:11、イザヤ19:1)が、このように、車のように雲の上に乗って上って行かれた、というのではないかと思われる(黙示録11:12参照)。

「天に上げられた」と訳されているが、原文では「天」という言葉はない。でもその次の10節の「天を見つめていた」、あるいは11節で「天を見上げて立っている」「天に上げられたイエス」「天に行かれるのをあなたがたは見た」など、こここのところは全部きちんと「天」という言葉が記されている。

ではこの場合の「天」とは何のことなのか。いわゆる、主イエスの昇天というその「天」というのは何を指しているのか。

『使徒信条』の中で「三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に坐したまえり」と告白されている。「よみがえり、天にのぼり、神の右に坐したまえり」と、こう三つ続ける言い方は、新約聖書の中ではマルコによる福音書の付録である 16 章 19 節に見られるだけ。「**主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。**」

ルカが福音書や使徒言行録を書く前に、既にパウロの手紙は書かれていたが、そのパウロの手紙の中には、“復活と昇天と着座”ではなくて、“復活と着座”、この二つが語られている。エフェソの信徒への手紙 1 章 20 節「**神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天においてご自分の右の座に着かせ**」という、こういう書き方。同じことが 2 章 6 節にも、またローマの信徒への手紙 8 章 34 節にも出てくる。

ルカが書いているこの使徒言行録も、この後、「昇天」という言い方ではなくて、例えば、2 章 33 節「**それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました**」というふうに、復活の次は「**神の右に上げられる**」という言い方である。5 章 31 節「**神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。**」

つまり、ルカが記す昇天の「天」というのは、実際にはそれまでにパウロが語っていた“神の右への着座”ということと同じ、全く同じことを言っている。「**神の右へ上げられた。**」

ただ“神の右へ座る”ということは、誰が見届けたこともない。これは、ただ詩編 110 篇 1 節に基いて信じている信仰の事実である。それに対して、“昇天”というの、冒頭で記述しているように、弟子たちみんなが「**見た**」現象だったのである。

では、一体“神の右への着座”というのとは違って、弟子の「目」の前で上って行くという“昇天”ということを書き通して、ルカは何を語り、教えたのだろうか。

復活された主イエスは「**四十日にわたって彼らに現れ**」と 3 節にあった。ところが、どうやって“さよなら”したかという方は殆ど書いていない。顕現された主と弟子たちとが食事をしたり話を聞いたりしたことは書いてあるけれど、では、それが終わって、“さよなら”と言う時、どういうふうに別れたのか。ただ一つ分かることは、ルカによる福音書 24 章 30 節、31 節、エマオの村に着いたクレオパたちの食卓で「**イエスはパンを取り、……、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。**」こういう別れ方だろうと思われる。他のすべての場合も。あの有名なトマスとのお話の場合でも、戸を閉じているところに忽然とイエス様は姿を現して、トマスに“わたしの傷に手をつけてみなさい”といろいろとおっしゃる（ヨハネ 20:26-29）。では、どうやってその後“さよなら”なされたのか。

使徒言行録 10 章 40 節には次のような言葉がある。

「神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。」

「神」が、復活のキリストを「人々の前に現してくださいました」。つまり、復活された主イエスは既に神のもとにおられる。そして、神様が良しとされる時に神のもとから遣わされて人々の前に顕現してこられたのである（22:14、ガラ 1:15-16 参照）。

神が天から復活の主イエスを現してくださいさり、そしてこの主イエスはまた人々の目の前から忽然と姿を消して来られた。これが「四十日」というものだったと思われる。“昇天”とは、こういう消え方ではなくて、わざと「天に上げられるのを」彼らが「見る」という別れ方をなされた出来事なのである。

つまり、主イエス・キリストの昇天とは、主イエスが「**生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに立証する**」ために顕現する役割が終わった。弟子たちがやっと納得できた、「**イエスは生きておられる**」という証言が出来る者となった。それでわざと、“これからもう繰り返しませんよ”という意味で、目の前で天に上げられたという出来事であると思われる。主イエスが生きておられるということに納得させ、そして証人に仕立てるために、もうこれ以上の証拠は必要ではない、むしろ、神の右に坐し礼拝を受ける主として本来の立場に立たれる、こういう変化（ルカ 24:51-52）、これが昇天という出来事だった、と言える。

10-11 節前半

「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。』」

10 節の最初の「離れ去って」と言うことは原文にはない。直訳すると「**彼らがイエスの行かれる天を見つめていた**」。ただ「**天を見**」ていたのではなく、あくまでも「**イエスの行かれる天を**」と、主イエスの行方の方に視線は向いているのである。

「**すると、白い服を着た二人の人がそばに立った**」。これは、ルカによる福音書 24 章の、あの復活の朝早く、アリマタヤのヨセフの墓でマグダラのマリアたちに現れた天使たちと同じ。どちらも「**二人**」の天使たちである。そしてどちらの場合も、天使たちはまず「**なぜ、あなたがたは**」という問い掛けで弟子たちの間違った行動を叱る言葉で始める。「**なぜ、（あなたがたは）生きておられる方を死者の中に捜すのか**」。「**なぜ（あなたがたは）天を見上げて立っているのか**」。「**白い服**」というのが 10 章 30 節では「**輝く服**」とも言われている（ルカ 24:4 参照）。

11 節後半

「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

「**まだおいでになる**」、「**このように来られる**」というこの約束を普通にキリスト教の“再臨”と約束と呼んできた。

この再臨が昇天を見送ったのと「**同じ有様で**」起こる、と天使たちは約束する。

この「**同じ有様**」というのは、

一つは、とにかく目で見える形を取ることであろう。今イエス・キリストは、「**わたしの内に生きておられる**」(ガラ 2:20)。目に見えない形で私たちと“共に”おられるが、再臨というのは、目に見えないで私たちと共にいてくださるイエス・キリストが再び私たちの目に見える形で共にいてくださる、そういう点で「**同じ**」なのだと思います。

もう一つは、ちょうど雲を車として天に昇られたように、雲に乗る形で来られるという点が同じだと思われる。ルカによる福音書 21 章 27 節「**そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る**」。こう主イエスは予告された。

「**またおいでになる**」再臨の時には、ルカによる福音書 21 章 28 節によると「**あなたがたの解放の時**」とあるように、私たちキリスト者の解放とあがないの完成する時、これが再臨の時である。

そればかりではなく、使徒言行録 3 章 21 節「**このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています**」ともある。

直接的には選ばれた者たち(キリスト者)の救いの完成のために、もっと大きく言うならば天地万物が新天新地に一新されるために、イエス・キリストは「**またおいでになる**」のである。

弟子たちは、主イエスの昇天を見送りながら、それまでの四十日間に度々味わったように、“また、先生は現れてくださるのだろうか、次に先生は何をしてくださるのだろうか”という思いで、「**天を見上げて立って**」いた。天使たちに言わせれば、それは間違った態度である。

弟子たちは、主イエスの復活を証言できるまでに納得させていただいた。だから彼らは、これから主イエスの証人となってすべての民のもとへと赴くべきなのである。そしてそのために、エルサレムに留まって約束の聖霊を待て、と主イエスはおっしゃった。だから、弟子たちが今すべきことは、聖霊の降るのを待って主イエスの証人となるという自分たちの新しい使命に備えることであった。

イエス・キリストの昇天とは、このように、主イエスの復活の証人を生み出すことが完了したということを示す、ある意味での宣言的な行為である。だから、昇天を見た弟子たちは、すべからず主イエス・キリストの復活の証人として自分を整えるということに、心を、目を向けるべきであった。